

# 「考えさせられる」葬儀 (十一)

## 調査結果から見る新型コロナウイルス感染症と葬儀事情

浄土真宗本願寺派総合研究所

新型コロナウイルス感染症（以下、コロナ）の蔓延によって、葬儀や寺院をめぐる状況に変化が生まれている。人類の歴史を眺めると、パンデミックは人の考え方や生き方、社会のあり方を大きく変容させてきた。宗教も例外ではない。『季刊せいてん』（二〇二〇年秋の号 一三三号）に詳しく書いたが、デフォーの『ペスト』には、ペストへの対応によって宗教が信頼を失っていき状況が見事に描きだされている。

今回の世界的なパンデミックは、宗教にどのような影響を与えるだろうか。既に公表された調査結果を参照しつつ、葬儀への影響を中心としながら、ポストコロナを展望したい。

### 一、既に実施された調査について

コロナは、宗教とりわけ仏教の世界に、どのような変容をもたらすのか。こうした問いは、仏教界全体で既に共有されている感がある。多くの場合、コロナのもたらす変容への関心は、「不安」という感情をともなっている。

そのことを反映してか、既にコロナの影響について複数の調査が実施され、その結果が公表されている。調査の名称と実施時期は次頁のとおりである。

①「寺院における新型コロナウイルスによる影響とその対応に関する調査」

大正大学地域構想研究所・BSR推進センター

〔調査実施日〕五月七日～五月二十四日

②「仏教に関する実態把握調査（二〇二〇年度臨時調査）

〔新型コロナウイルス感染症が仏教寺院に与える影響〕

公益財団法人全日本仏教会 大和証券株式会社 共

同調査

〔調査実施日〕八月二十一日～八月二十二日

③「(学院生)新型コロナウイルス(COVID-19)の影響につ

いてのアンケート」

中央仏教学院 長岡岳澄氏

〔調査実施日〕五月二十五日、六月九日、六月

二十五日

①は僧侶対象に実施された調査であり、僧侶の視点から見たコロナと寺院の関係が浮き彫りにされている。また五月中に調査が実施されており、まさしく緊急事態宣言の真只中の時期に、五一七名の様々な宗派の僧侶から回答を得ている。②の全日本仏教会(以下、全日仏)の調査は大和証券株式会社に調査を委託し、一般の六一九二人を対象に実施された。いずれの調査もインターネットを用いた調査であり、各宗派とは無関係に実施されている。

また、③は中央仏教学院において、長岡岳澄氏(中央仏教学

院講師)により、学院生を対象にして、ネット(グループフォーム)を用いて行われた調査である。計三回(五月～六月)にわたって行われており、そのデータの一部を活用させていただいた(以下、それぞれ①②③の表記で説明に用いる)。

\*①②についてはネット上に調査結果が公開されている(注1)

## 二、ほとんどの寺院が経験する

### 法事の中止・延期

コロナの影響で法事の中止や延期が起きている。①の調査によると、九〇%近くの寺院が経験している。一方で寺院側から法事の中止・延期を提案したものは二〇%弱に過ぎず、ほとんどのケースが門信徒・檀家(以下、門信徒)から要請されたものであるとわかる。寺院としては、法事を実施したいが、門信徒からの要請で、やむなく中止・延期となることが推察される。

なお、①では、「月参り」「定期的に行う行事(写経会・法話会・座禅会等)」「毎年行うイベント(落語会・コンサート等)」の三種類について「どのように行っているか」と尋ねている。「月参り」を「見合わせている」と答えたのが、(ふだん月参りを実施している寺院のうち)二二・三%となっている。およそ五カ寺に一カ寺が中止という決断を行っている。それに対して、「定期的に行う行事」「毎年行うイベント」を見合わせているのは、

それぞれ七六・四％、九一・二％である。訪問型の法務は、僧侶から門信徒への感染が危惧され慎重になりそうだが、やはり中心的な仏事としての認識が強いのか、中止率が低い。一方で、寺院で行う行事（法要を除く）の中止率は高い。多くの人が集まることへの配慮が感じられる。

なお、①の調査時期と比較的近い中仏の③では、月参りの回数が減少したと答えた割合が三三・三％、法事の減少が二八・九％となっている。月参りを比較すると、①の二二％より数値が高くなっているが、①は寺側から中止したケースを尋ねており、③は回数減少であるから、門信徒側からの中止・延期要請を含む③の方が当然高くなる。対象が異なるため①と③を比較するのは乱暴だが、敢えて比較するなら、月参り自粛二二・三％↓月参り減少三三・三％であり、月参りの門信徒側からの中止・延期要請は意外と少ないのではないかと推測される。

### 三、月参りの減少が定着することへの不安

関連して①では月参りに関する自由記述の回答があり、月参りの減少がそのまま定着してしまうのではないかとという不安が三三カ寺から出されている。「コロナ以後も、このまま断られしてしまうのではないか」という不安である。

月参りが盛んな地域では、月参りが寺院の運営基盤となっているケースが多い。今後の変化を注目する必要があるし、また

月参りという重要な習慣を継続する手立ても検討が必要だろう。この点は後で言及する。

### 四、加速化する葬儀の変化と危機感

さて、いよいよ葬儀についてである。①では、「会葬者の人数が減った」「一日葬など葬儀の簡素化」「打ち合わせ時間の短縮」「特に変化はない」の四つの選択肢を設けて質問している。まず驚かされるのは、「特に変化はない」という答えは五％にも満たない点である。また九〇％近くが「会葬者の人数が減った」と答えている点である。

会葬者の減少や、「家族葬」の増加は、近年の定着した流れであり、その変化が一層大きく感じられているものと思われる。コロナ禍は、既に起き始めていた現象を加速化させているとしばしば指摘されるが、葬儀においても簡略化の加速化が起きていると推察される。

「直葬」については僧侶の側から実態を把握しづらいためだろうか、①では質問していない。一方、②は一般の方を対象にして「葬儀の実施有無と意識」を尋ねていて、菩提寺の有無に関係なく三五％程度の人が「今後（も）直葬にすると思う」と答えている。現在、直葬の割合は一割程度と言われているが、この意識が現実化すると三分の一が直葬ということになり、寺院の運営にかなり大きな影響を及ぼすだろう。さらに②では菩

提寺の有無別に今後の葬儀の意向を尋ねており、「菩提寺有り」グループで「直葬」あるいは「オンライン葬儀も検討」と答えているのは一三％程度にとどまっている。

このことから、寺院とのご縁があれば直葬となりにくいということがわかる。今後寺院が、誰と、どのようにご縁をつないでいけるかが、直葬の動向を左右しそうである。

## 五、葬儀の簡素化定着への不安

葬儀について、①では僧侶の声を自由記述で拾っている。「葬儀、法事の小規模化が一気に進みかねない」「行事を延期する、またオンライン化を進めた際に、その措置を一時的なものとして受け取らずに（今後もそれで良い）となってしまい、葬儀などの簡素化が進んでしまうのではないかと考えています」「葬儀の重要性が無視されてしまう」「一度楽なことを憶えると元の面倒なやり方には戻らないかもしれない」といったように、コロナによる簡素化が定着するのではないかと不安が、なんと一八件も寄せられている。やはり月参りと同様に、「変化の定着」への不安が大きいのである。

コロナ禍で月参りが中止になってしまう傾向、葬儀が直葬になってしまう傾向に対しては、ご縁を新たに結ぶ、あるいは何らか別の方法でご縁を継続することが重要というのは、前節で述べたとおりである。

自身の個人的な経験であるが、コロナ禍の緊急事態宣言下で、参列者ゼロの葬儀、リモート葬儀、火葬場だけの葬儀を、それぞれ一回ずつ経験した。リモート葬儀ではタブレットで父親の遺体を見た息子さんが、また火葬場でしかお別れができなかった二十代の息子さんが、号泣されていた。死別は辛いものであるが、この光景からは、大きすぎる悲嘆が感じられ、時間をゆっくりとかけて死別の悲嘆を受け止めていくことの大事さを実感した。

## 六、葬儀から失われた言葉

『季刊せいてん』（二〇二〇年秋の号 一三二号）に「パンデミックと看取りの無い世界」を寄稿した。

筆者が経験したコロナ禍の葬儀において、「息子が到着したのを待つて亡くなりました」「最期は穏やかな顔でした」「母の手を握って、涙を流しながら父は亡くなりました」といった語りが失われていることに気付いたことがきっかけとなって書いたものである。

今は少し改善されているようだが、一番深刻だった時期には看取りができず、大切な方に寄り添い、また親しい人に寄り添われながら亡くなっていくということができにくくなっていった。

そのため、死にまつわる言葉が失われたのである。こうした語り共有されることも、葬儀の大切な意味であると感じられ

た。喪失の語りが失われるということは、宗教的なものへのご縁も失われることではないかと感じられ、(本原稿の目的である調査分析に基づく考察ではないが) コロナと葬儀を考える上で、重要な課題ではないかと考えている。

## 七、門信徒の不安・困窮から考える

僧侶も不安だが、門信徒も不安である。僧侶や寺院側の視点にとどまっていたのでは、僧侶や寺院が、人々の側から必要と感じていただけないだろう。いま、門信徒は、何を不安に感じているのだろうか。そこに注目した調査結果も出ている。

まず①は、僧侶が門信徒からどのような相談を受けたかを尋ねている。相談内容は、「法要に関する相談」(一九三件)、「生活の不安やストレス」(二二件)、「その他」(件数不明)と、法要に関する相談が突出して多い。

「法要に関する相談」では、自粛や参列者を減らすといった、中止や延期に関する相談内容が多い。こうした相談にどう対応するか、例えば本堂の防疫対策等は重要な課題だろう。ただ、同じく①や③の結果から、多くの寺院で対策が既に進められていることが確認できる。

一方で二二件にとどまるが、精神的な悩みを相談されたケースがある。「施設に入っている親に面会できない」「給料が無いままの生活」「子どもたちが家に閉じ込められてストレス」「月

忌参りや法事で、外部の人に会わないと、認知症が進んでしまっている」といった切実な悩みが語られている。

こうした門信徒の悩みを念頭において、今後の活動を検討する必要があるだろう。①③には「門徒に電話し、電話で一緒に読経(鳥根)」「お供えのお菓子などを集めて、約一〇〇セットの菓子詰め合わせを作り、子供達に配布」「寺子屋自習室をはじめました」というように、具体的な対応、実践例も報告されている。動き始めている寺も多い。

こうした相談内容から、どこに門信徒の期待があると言えるのか、コロナの蔓延は、僧侶や寺院の役割は何かを、あらためて問い直す契機となっている。

これに関連して②では、直接的に、コロナ禍において「今後、寺院・僧侶に求める役割」を尋ねている。全体としては「不安な人たちに寄り添う」が最も多く三三・一%。以下、「コロナ禍の収束を祈る(原文通り)」「二一・九%、「しっかりとお葬式を執り行うことを心掛ける」一八・一%、「悩み相談などの傾聴を行う」一七・五%の順番となっているが、こと「菩提寺への満足度が低い層」では、「生活に困っている方たちの支援を行う」が二八・三%と、数値が高くなっている。

裏返せば、寺院・僧侶に社会的な活動を期待している層において、菩提寺への満足度が低くなっている。社会的な課題が噴出しているコロナ禍において、注目すべき調査結果の一つと言える。

このように、葬儀や法事等をきちんと勤修すること以上に、不安な人たちに寄り添うことが要請されていること、菩提寺に不満を持っている層では、困っている人への支援の方が高い数値となっていることは注意される。人々の不安と困窮に向かい合わなければ、「(コロナ禍において寺院僧侶が)特に担うべき役割は無い」(三五・三%)と思う人が増加する可能性を示唆している。

## 八、パンデミックの中で 何を伝えようとしているのか

今回、①の調査で、いま何を伝えたいかということ聞いています。多くの僧侶が、いま何を伝えるべきか、どのように伝えるべきかを模索している時であり、非常に参考になる。

大正大学の調査チームは、自由記述の結果を以下の九つに分類している。

- 一、「今だからこそ」
- 二、「仏様の尊さ」
- 三、「情報に踊らされない、差別をしない」
- 四、「日々を大切に生きる、日常のありがたさ」
- 五、「コロナウイルスについて」
- 六、「人とのつながり」
- 七、「乗り越ええられる」
- 八、「寄り添う」

## 九、「その他」

三番目の差別に関する発信が重要であることは言を俟たない。ウイルスは、人種や国境、文化や信仰の違いと無関係に感染する。そのため、感染症は、みんな協力して向かい合わなければならぬ。しかし現実には相反する状況を生みがちだ。ドイツの哲学者マルクス・ガブリエルは、「十七世紀、ヨーロッパでペストが大流行した際は、外国人差別やテマが横行した」と歴史を振り返り、感染症に苦しむ時代において、排他的な感情が起きやすいと警鐘を鳴らしている。

一番目の「今だからこそ」では、「死に対してリアリティを感じる時期だからこそ」という記述がみられる。なかなか普段は意識されにくい生死の問題が浮上している時だからこそ、生死を超えていく仏法の役割があるとする意見が示されている。

五番目の「コロナウイルスについて」に分類された記述の中には、「ウイルスを〈絶対悪〉と捉えず」という内容が見られた。ウイルスは、人間の免疫機構に作用する。「自分」の免疫機構が過剰に反応すると、重篤な肺炎が起き、命の危険に晒される。ただ、人体は、こうしたウイルスの刺激によって免疫機構が発達し完成されてきた。ついつい制御できないものを〈悪〉とし、排除しようとしがちだが、人類はウイルスを含めた自然の中に生きていく。そのため、自然への人為的介入は長い時間の中で見るとしっぺ返しを受けかねないということにも注意すべきである。宗門内で、かつての感染症について、何をどのように語って

きたかを示す記録は乏しい。そのような中で、故山本仏骨和上のものが注目される。和上はスペイン風邪（スペイン・インフルエンザ）でご家族を亡くされている。そのことについて和上はご法話の中で繰り返し語ってこられたようである。その記録を『宗報』（二〇二〇年七月号二二、二三頁）でご紹介した。こちらもぜひ、参考にしていただきたい。

## 九、結びにかえて

新型コロナウイルス感染症に惹起された事態は終わりを迎えておらず、結論めいたものを書くことがはばかられる。その中で、今後の課題について、三言及しておきたい。

一つは、ポストコロナを展望するためにも、コロナ禍で起きている変化を、丹念にトレースしなければならないということ。今回は大正大学や全日仏の調査を紹介しながら論を進めたが、コロナ禍が続く中、仏教各宗派で継続的な調査を行い、結果を共有していく必要が切に感じられる。特に、コロナが収まり始めた時に、寺院を取り巻く状況、僧侶の役割が変化するか、元に戻るのかという問題がある。すなわち「変化の定着」という点である。すでに真宗大谷派ではコロナ禍での寺院運営に関する調査が実施されており、その結果が待たれる。

二つ目は、「エッセンシャル・ワーカー」「使用価値」といった言葉が注目されている。言葉は時代状況を映す鏡である。コ

ロナ禍で問われているポイントの一つに、「本当に必要なものは何か」という問題意識がある。行動が制約される中で、何が最低限の活動かが問われているのである。「使用価値」とは、水や土地のように、なければ生活が成立しない、生きること不可欠なものを持つ価値のことである。エッセンシャルも、同じく不可欠という意味である。こうした言葉のふるいに、色々なものがかけられている。寺院や僧侶も例外ではない。

三つ目は、仏教の智慧。今、自然科学の分野で、さまざまの勢いでコロナに関する論文が発表されているのはご存じの通りである。人文科学の分野でも、自然科学ほどではないが、コロナに関係する論考が大量に発表されている。いま、人々は生き方の指針を求めている。仏教者も、今、仏教の智慧にもとづいて何を発信していけるのかが問われている。

仏教が発信していくべき価値は、コロナ禍に関与する中で見いだされていくものである。「考える」のではなく「考えさせられる」ことが大事ではないか。（報告者 藤丸智雄）

### （注1）

①「寺院における新型コロナウイルスによる影響とその対応に関する調査」大正大学地域構想研究所・BSR推進センター

<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000021.000054969.html>

②仏教に関する実態把握調査（二〇二〇年度臨時調査）報告書「新型コロナウイルス感染症が仏教寺院に与える影響」公益財団法人全日本仏教会 大和証券株式会社 共同調査

<http://www.jbfn.jp/activity/kohou/tyousa2020?id=>